

神戸女学院建築のこころとかたち

—愛神愛隣—

石田忠範建築研究所代表 石 田 忠 範

先のお二方とは違って、建築の話題を少し薄めて、ヴォーリズ、あるいは神戸女学院の気持ちになってお話に加わる方がいいのではないかと考えています。

今年はヴォーリズ没後50年の年に当たりますが、私は1961年に一粒社ヴォーリズ建築事務所に入社しました。近江兄弟社の建築部門であったヴォーリズ建築事務所から事業を継承して分離独立した、丁度その年でした。ヴォーリズは存命中で、軽井沢でのクモ膜下出血の後、現在のヴォーリズ記念館でミセス・ヴォーリズの看護の下に療養中であった病床を、先輩に連れられてお見舞いしたことがあります。透き通るようなピンクの頬の表情を忘れることが出来ません。意識のない状態で、直接お話を聞くことはありませんでした。書かれた言葉や先輩の話、あるいは建築を通して教えを受けましたが、何よりもヴォーリズのこころを伝えるのは、ヴォーリズの生涯を導いた聖書の言葉だと思います。

方位を示す矢印のあるヴォーリズ直筆のレイアウトスケッチがあります(図-01)。初めてこの敷地を訪ね、散策したときの大まかな地形の印象のうえに、さまざまな建物やその間の庭や道路との関係を描きこんだものと思われます。広場型キャンパスである神戸女学院の基本的な構想が、

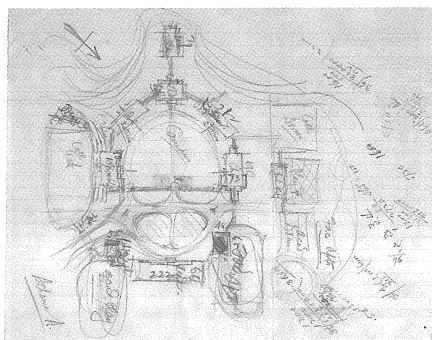


図-01

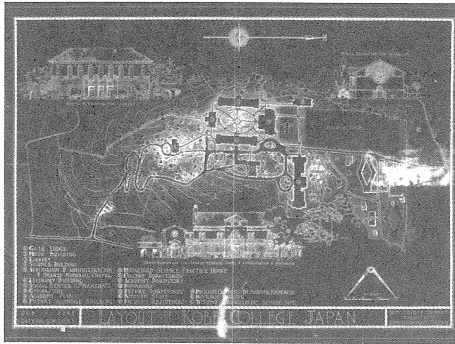


図-02

このスケッチに示されているのです。岡田山キャンパスはこのイメージに従って造られ(図-02)、現在に受け継がれてきました。

岡田山の敷地について、ヴォーリズは「新校舎の為に与えられたこの美しい景色より受けた利益…。この土地の天然美と、この眺望…」 「学校の立地としてこの丘の

敷地以上のものはない」と評価して、「建物を建てるために美しい自然の景観を切り崩し、破壊しない…」、自然の地形に従って建築することを設計の基本姿勢としました。これは、自然に形成された確実な地盤の上に基礎を据えて、構造的に安定した建築を経済的に実現するためと考えるヴォーリズの方法でもありました。設計者、ヴォーリズの利便性を大切にするという「こころ」と、予算の無駄使いを避けるという合理的な設計姿勢は、見せかけのモダニスト嫌いで、真にモダニストとも云うべきヴォーリズの設計理念でした。

唯一「平坦にしなければならないのは運動場のみ…」と考えて、敷地北西部の谷を最小限度の造成によって拡張してグラウンドにしました。そのうえ、造成の傷を残さないように表面を芝生で覆いました。これが、「なでしこジャパン」のはじまりに寄与したと、伝えられています。

ヴォーリズは、「建物それ自身が生徒の上に積極的影響を及ぼす」「もしもこの建築が真に成功したとすれば、その最も重要な機能の一つは、永年の間に人々の心の内部に洗練された趣味と共に美の観念を啓発する事…」と書いています。

古代ローマの建築家、ウィトルウィウス (Vitruvius) が『建築書』に記した「…これらは、また、強さと用と美の理が保たれるようになされるべきである(森田慶一訳)」とのテーゼに遡るまでもなく、建築の要素の第一は機能性ある

いは有用性、つまり役に立たねばなりません。現代建築はこの「用」にのみ重点が置かれているかのようで、「美」は付随的な装飾になっているように思われます。ヴォーリズは、まず、第一に「美の観念を啓発すること」でなければならぬとする。「美」を「機能」と云っているところがすごい。現代建築が見失ったところです。

ここから、ヴォーリズはキャンパス全体に均整を保たねばならないと考えました。均整というと単に見かけと思いがちですが、建物と庭や道路など、図と地のバランスだけではなく、建築材料の選択と使い分けから、必要で適切な建築設備の配置に及ぶ、キャンパス全体のあらゆる要素の隅々まで、注意深く均整を求めました。

確かに見かけにも均整が保たれています。中庭のプロポーションを見てみると、対面する図書館と総務館の距離が74.5m(246尺)、理学館と文学館の距離は50.9m(168尺)で、ほぼ3:2。一つの古典的比率になっています(図-03)。ライカが最初に採用した35mmフィルムのプロ

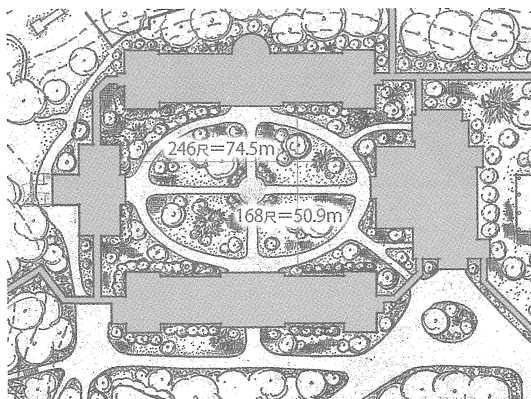


図-03

ポーションです。厳密に計算すると東西の幅が4尺長い。目の錯覚を考えて南北の距離が遠く見えないように考えたのかもしれませんが、これも感覚による偶然かもしれないが、オリジナルの窓ガラスのプロポーションが正確な黄金比になっています(図-04)。



図-04

ヴォーリズは、「均斉」とは如何なるものであるかと云う事は難しい問題で、簡単にルールで決められない、これは感情の問題だ、と書いています。ここで云う「感情」の原語はおそらく feeling ではないかと考えてみると、フィーリングとは「気分」。如何にもいい加減な感じがしますが、わるい建物の事例に「適当に設計された建物」というヴォーリズの言葉もあり、建築家、村野藤吾さんのエピソードにもあるのですが、この気分とは、よく訓練された、磨かれた結果の気分であるということです。

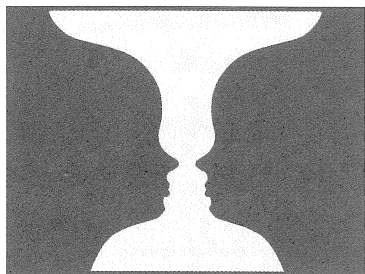


図-05

建築というのはまず空間ですから、心理学で学んだ「ルビンの壺」のように「図」と「地」の両面を感じなければなりません。その点、日本に数少ない広場型キャンパスである神戸女学院から学ぶことは多いのです(図-05)。

ヴォーリズの建築の個性が最も特徴的に顕れる場所、ヴォーリズの「こころ」が「かたち」に現れる典型的な場所、ヴォーリズ建築の秘密は階段にあると思っています。緩やかな上りやすい階段、上ることが楽しい、上りたくなる階段です。

その造り方の秘密は階の高さを抑える工夫にあります。必要な天井の高さを十分に取りながら階高を低くして緩やかな階段を造る。その方法は天井懐の高さを節約するということにあります。そのためには上の階の床を支える構造に工夫があります。2階の床を支える梁を小さくする。小さな梁を沢山並べて床を支えるジョイストスラブと云う工法です。この構造は鉄筋コンクリートの建物だけではなく、ケンウッド館など、木造の建物にも共通して使われています。

その結果が、ヴォーリズの建築を評してよく言われる、「暖かい」、「優しい」、さらには「懐かしい」という言葉になって返ってくる、親しみ深い外観を創っているのです。

次に、「保存の行われる三つの原則」いうものをご紹介します。

1993年のこと、東京六本木の東洋英和女学院の校舎が60年目に建て替えられることに成り、その年の夏休みに解体撤去されるという直前に、同窓会の発案で調査報告書をまとめて建築を記録として保存しようということになり、調査チームが組織されて、私も山形先生とご一緒にチームの一員として参加することになりました。

この校舎は、神戸女学院の岡田山キャンパスと同時に並行して建築されたヴォーリズ事務所の設計になる校舎で、1933年の春にオープンしました。郊外型と都市型の違いはあるとしても、スパニッシュ・ミッション・スタイル。双子姉妹のような建築です。同じスタッフによる設計図面が残されています。

この記録調査に立ち会いました時、保存学の専門家である東京芸術大学の前野まさる先生と出会うことになり、解体直前のヴォーリズ建築の中で立ち話をするうちに、保存の行われる三つの原則があり、この一つも欠くことなく揃っていないければ、やがて建物は解体されることに成るという現実を知ることになりました。

保存の行われる三つの原則の第1は Liability。建築には責任がある。便利で使いやすく、役に立つという責任です。いつまでも性能を落としてはならない。その時代の要求に応じて、むしろ、建築の性能は高められなければならないということです。

第2は Visible Value。価値が見えること。建物の価値が隠されず、誰の目にも分かりやすく見える形になっていること。冷暖房や電気設備の改修工事の時に、パイプや配線が露出して、建物の美を隠すことのないように気を付けなければなりません。第3は Cleanliness。つまり、きれい好き。日常の使い方に気を付ける。習慣的に、清潔さを保つこと。そして、これを維持するシステムがあるということです。

神戸女学院には、この三つの原則のどれ一つも欠けることなく保たれて来ました。それで、今日の日を迎えることになったのだと思います。

神戸女学院岡田山キャンパスは今年で81年目になります。戦争や地震などを経験してきました。阪神淡路大震災の時に文学館の屋根が落ちました。戦時中の焼夷弾による火災で焼失した屋根の木造の小屋組みが応急的に修復されましたが、瓦屋根だけが崩れたのです。何れも、瓦屋根の下にコンクリートの床(スラブ)があったので、内部に支障はありませんでした。同じ構造の理学館は現在も建築当時のままで、地震には問題なく耐えました。

太平洋戦争末期の1942(昭和17)年には金属回収令が発令されて、金属で作られたものは単なる材料として、ことごとく徴用されました。神戸女学院も門扉や窓の格子、バルコニーの手摺、暖房のラジエーターやグリル、階段の手摺子に真鍮ノンスリップ、そして照明器具などが供出されました。これは講堂のロ



図-06

ビー中央の素朴な鍛鉄製のシャンデリアと扉口正面に立つ2対の外灯ですが、写真を元に復元したものです(図-06/07)。講堂の外灯はブリキ板を切り抜いてハンダ付けで、そっくり同じ形の代役が作られていました。執念のように形を模して作られたブリキの外灯から、この時代の人々の痛むところと、このキャンパスへの

愛情が、身に沁むように伝わってきます。平和の回復したこの場所に立つと、私には、おもちゃの兵隊が敬礼しているように見えます。

大学の中庭をめぐる回廊の、出入口扉の上の欄間窓、つまりタンパンを飾っていた鍛鉄製の唐草模様のグリルは、代わりに合板を丹念に切り抜いて同じシルエットが作られてい

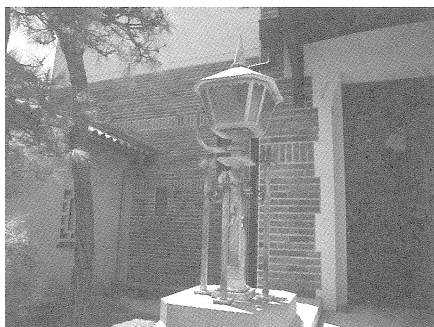


図-07



図-08

でした。

ヴォーリズは、1941(昭和16)年の1月に日本に帰化して、名前を^{ひとつやなぎ}一柳^{めれる}米来留としました(図-09)。ヴォーリズのサインには丸の中に点を描いたしるしがあります。○に点の意味は、「近江八幡は世界の中心である」という事だと説明していたそうですが、私は、ヴォーリズ自身がキリストを伝えるために蒔かれた一粒の種であるという心を現しているのでは



図-10

ないかと思っています。

時に、逆三角形にGNSの文字を重ねたサインを描きました(図-10)。Gが上にあって大きく、その下にN、一番下の小さな三角にSがあります。GはGod、神が上にあって最も大きく。中央のNはNeighborで隣人。SはSelf、自分自身は最も小さく下にある。これは神戸女学院の「愛神愛隣」に通じる言葉で、ヴォーリズにとって神戸女学院の建築は、このために日本に来たと考えるほどに、興味深い仕事であったのではないかと思います。

私事です、私は中学生の時から関西学院のヴォーリズ建築のなかで育てら

ました。現在もそれは残されています(図-08)。私は2008年の「ウィリアム・メレル・ヴォーリズ展」の図録のコラムに、「この建物が若し文化財に指定されるときが来るとすれば、この木製ロートアイアンも文化財になることだろう。」と書いています。こんなに早く実現するとは思ってもよらないこと



写真館、近江八幡(米来留)と記されたヴォーリズ式のサイン (図-09)



図-09

れました。礼拝で、「君たちは世の光である」という聖書の言葉を聞いた。努力して「世の光になりなさい」ではなく、何もわきまえない小さな者を、ヴォーリズの建築は、この聖書の言葉通りに大切にもてなしてくれました。

神戸女学院の建築も同じです。デフォレスト先生はじめ学院の方々の「こころ」とヴォーリズの「こころ」が、同じ聖書の言葉に響きあって、このキャンパスの「かたち」になっています。

「愛神愛隣」は聖書の言葉からきていますが、人間が先に神様を愛するというのではなくて、別の聖書の言葉が示すように「わたしたちが神を愛したのではなく、神がわたしたちを愛して、…(ヨハネの手紙Ⅰ 4:10)」と、まず、先に神が愛されたこと。私たちは「大切にされている」というメッセージを、このキャンパスが、ここに学ぶもの、ここに生活するものに伝えてくるのだと思います。そのことによって、隣人を大切することができる人格が養われるということが起こるのだと思っています。

当然ですが、このキャンパスをヴォーリズが一人で作ったものではありません。この写真は1937年のヴォーリズ建築事務所作品集の最初のページにある当時の



図-11

事務所スタッフの写真です(図-11)。写真の上にヴォーリズの書があります。本来「信望愛」の聖書の言葉が、ヴォーリズ一流のジョークがはたらいで「信働愛」になっています。ひとりが讃美歌を口笛で歌うと、何処からともなく設計室に口笛の音楽がハモる、と云う幸せな事務所でした。建築の「こころ」を確かにチームのものにして、「かたち」に実現したヴォーリズの偉大さを知ることができます。